

緒言

ローランド・ドメーニグ、平沢剛

二十一世紀に入り、一九六〇年〜七〇年代の大島渚、吉田喜重、篠田正浩、羽仁進、松本俊夫、若松孝二らニューウェーブを中心にした日本映画に対する国際的な再評価が本格的に始まった。世界各地の映画祭、シネマテーク、ミニシアターでの特集や上映、DVD販売、大学や文化機関でのシンポジウムや関連書籍、研究書の刊行も相次ぎ、検証される作家や作品の幅も飛躍的に増え、現在では日本映画史における重要な研究対象の一つとして定着してきたと言える。また、既に歴史的評価を獲得している黒澤明、溝口健二、小津安二郎、成瀬巳喜男といった日本映画の巨匠をめぐっても、それぞれに生誕百年という節目を迎え、文字通り世界的な催しが続いた。こうした関心の高まりから様々な新しい交流が開始され、かつては容易でなかった世界各地、多言語での調査が可能となり、多くの国際的な共同研究に結実している。しかし、世界における日本映画研究

が発展する一方で、研究が最も盛んな北米であっても日本国内の批評や先行研究、豊富な資料が必ずしも共有されているわけではなく、また各地域に固有の政治的、歴史的な受容の背景が、国や地域を越えて議論されることは極めて稀である。更に、欧米で進んでいる理論的研究が日本語で紹介されていないといった不均衡も未だ続いている。

こうした背景を踏まえ、同時代における上映から批評にいたる受容全般から現在の研究動向を含めて、日本映画をめぐる各国、各地域の状況を幅広く共有、議論するため、明治学院大学文学部芸術学科、言語文化研究所の共催により、第一七回日本映画シンポジウム「一九六〇〜七〇年代日本映画と世界——」のように見られ、語られたか」が開かれた。本特集は、シンポジウムの発表を中心に、翌日に行なわれた関連企画「日本映画ワークショップ」からの発表を部分的に加え、編纂されたものである。シンポジウムには、アメリカ、カナダ、フランス、オーストリア、オランダ、韓国、そしてキューバから研究者が集い、日本の研究者と同時代の映画監督の代表として足立正生を交え、活発な議論が交わされた。ワークショップでは、受容論を中心にしながら、そこにどまらぬ新しい研究内容が発表され、シンポジウムでの議論や課題も踏まえて、討論がなされた。

なお、時間的、誌面的な制約により、以下の発表を再録することができなかったため、タイトルのみ記載させていただいた

い。

日本映画シンポジウム

「規範への問いかけー日本の《ニューウェーブ》をめぐって…ド

イツ語圏の実例」ローランド・ドメーニグ

「アンダーグラウンドとオリエンタリズムムーオランダ、および
北欧における日本の芸術映画の受容」ディック・ステゲウエ
ルンス（オスロ大学）

「北米における同時代の映画批評の検証」マーク・ノーネス（ミ
シガン大学）

日本映画ワークショップ

「世界における日本映画研究をめぐる現状分析と問題点…北米
の映画学における空間論的転回と六〇―七〇年代の日本映画
の "theatricality"」ダイアン・ルイス（現・ワシントン大学）

「ポストコロニアル・アーカイブとしての日本の映像」オリヴ
ァー・デュー（現・明治学院大学）

「岩波映画―オガワ・ツチモトの向こうへ…英語圏における
日本ドキュメンタリー映画研究の現況とこれからの展望」角
田拓也（イエール大学）

「アーカイブ的思考について―草月アート・センターと『印
刷された問題 printed matter』」上崎千（慶應義塾大学）

また本学の斉藤綾子、門間貴志に加え、シャロン・ハヤシ
（ヨーク大学）、ワダ・マルシアアーノ（カールトン大学）にデイ
スカッサントをお願いした。北米の日本映画学会「キネマ倶楽
部」を中心に、欧米の映画学会やシンポジウムでは、日本映画
研究者が集う機会が頻繁に持たれ、日本からも多くの研究者が
参加しているが、日本国内でのこうした試みは、まだまだ盛ん
とは言い難い。他方で、同時代の作家や批評家に同席いただい
たり、欧米のネットワークに必ずしも参加していない東アジア
や南米などの研究者を交えるなど、日本でしか実現し得ない議
論、交流の場も少なくないため、両日のディスカッションでは、
今後の日本における、そして世界における日本映画研究の方向
性や可能性について、様々な提起がなされた。

最後にご参加いただいた方々には、改めて御礼申し上げます。
今回のシンポジウム、ワークショップ、および特集の編纂によ
って、更に議論や研究交流が活性化することを切に願っている。